

南極越冬新聞

S10トピックス

NHK特派員 木村征男

木村 征男（きむら ゆきお）

報道局カメラ取材部

南極越冬新聞 S10 トピックス

昭和45年12月25日 第1刷発行

定価 580 円
<検印廃止> 著者 木村 征男
発行者 浅沼 博

100 東京都千代田区内幸町2-1-18
発行所 日本放送出版協会

振替 東京 49701

乱丁・落丁はお取替します

凸版印刷・田中製本

0325-002045-6023

1. 仁越冬新聞

S10トピックス

NHK特派員
木村征男

序

私も第十次南極越冬隊は何をしたかと問われれば、観測面でのあれこれを答えるのが本筋であるが、それはさておき、実はちょっと自慢したいことがある。それは昭和基地で一年間ハガキ大の日刊新聞を発行したことである。

文字どおり一年間で、日本内地の新聞休刊日にも休まず、一九六九年二月二一日からのまる一年である。今までの日本隊はもとより外国隊でも一年続けた例はないのではなからうか。新聞といっても二九名（NHK木村征男記者を含む）の「特定少数」を相手にしているので「同人雑誌」に近いといえよう。別に正式な会議で決まったというわけではなく、ごくすんなりと発行され、いつの間にか一年続いてしまった。隊員有志が記者となり、一人ずつ交代で取材から印刷、配達までの一切をやったが、実は本来朝刊であるべきものが深夜刊や翌日刊になったこともあったのをもらしておく。横書きの『シヨマベシメ』が紙名で、正式になんと呼ぶのかはつきりせぬまま終刊となったが「エステン」と略称されていた。せっかくマスコミ攻勢のない南極へ来ているのに何を好き好んでマスメディアを作るのかと微笑笑も禁じ得ないが、この豆新聞のはたした精神衛生面での効果は大きかった。三度の食事なみに越冬生活にとけ込んでおり、遅配の日などは皆なんとなくそわそわしたりしたものであった。

本書はこの「エステン」をもとに書かれたもので、越冬生活のすべてというよりは、実生活面が多

く現われてくるのは避けられない。そこで表芸である観測面について知っておくことはより理解を深めるであろう。第十次観測は昭和基地再開（一九六六年）いろいろの長期計画に沿ってなされた。すなわち、基地でのロケット観測、野外での内陸調査旅行、航空機利用の観測が主な計画である。第十次隊は越冬前の夏の間にロケット打上施設三棟の建設に従事した。また小型機を再開後はじめて持ち込んで基地南方約三〇〇キロにあるやまと山脈の空中写真をはじめ撮影した。内陸調査はやまと山脈を含むみずほ高原の雪氷調査を主として行なわれ、一〇名が一九六九年一月一日から九〇日、約一、五〇〇キロを踏破した。一方基地においては日本内地の気象台などと同じく、昼夜を分かたず気象・電離層・オーロラ・地磁気・地震・潮汐などの観測が一九六六年いろいろ休みなしに続けられている。また特殊な研究題目に応じて超高層物理から人体生理に至るまでの諸分野の研究がなされた。

こういった観測者一六名とこれを助ける設営隊員一二名（隊長を含む）とがそれぞれの専門分野の守備に当るのは当然として、さらに生活面での兼務が与えられた。この兼務は全員が安全で愉快な越冬生活を送ることにつながり、本当の意味でのサービスピリットが隊員個々に要求された。昔に比べると基地の物資環境はぐっと良くなったが、南極の自然の烈しさは変わらない。この厳しい環境での小さな社会の特殊性が本書からどの程度推察して頂けるであろうか。

雪と氷と岩の昭和基地の隣人は一番近くて三〇〇キロのソビエト基地、いつも気象電報を送っている母局のオーストラリアのモースン基地は一、〇〇〇キロ離れている。南極は超過疎地帯である。現在一〇か国が約三〇の越冬基地を持っているが、大陸に平均に分散したとしてもわが国と同面積に一箇所割となる。

しかし、これらの基地の観測者には南極人（ホモアンタルクチカ）ともいえる同胞感、使命感が流れている。それは、南極は国際協力のもとに平和目的のための科学観測を行なっている、世界で唯一の戦争の陰のない「白い大陸」に住んでいることによる。私どもの越冬した一九六九年は奇しくも南極条約署名十周年に当り、各国基地とメッセージを交換してこのような協力を誓い合った。荒涼たる南極での一年の生活が人類の明日へ大きくつながっていることを知って頂けるならば幸いである。

一九七〇年一二月

第十次南極地域観測隊長

楠 宏

目次

序

第一章

夏

接岸 建設と輸送 第十次越冬隊の成立 S10トビ
ツクスの誕生 生活のきまりと職務 入院第一号

七五

第二章

秋

オーロラの季節 厳重な防火体制 ニックネーム
越冬隊の食生活 越冬生活一か月 昭和基地にもある
公害 青木美香後援会誕生 南極の野菜づくり 麻
雀公式戦 越冬隊員の健康 ハム、本国と交信 夫
婦愛 ベンテンさんの話 ブルの死 最大の人気娯
楽「映画」 賑うバー「いちまる」 電離棟前室竣工
南極史上初のマラソン大会 内陸旅行班活動開始 越

九一

第三章

冬……

冬隊の誕生祭り　風薫る五月はウソでした　昭和基地
百人一首　全天コロナ現わる　内陸旅行班トレーニング
隊長招待コクテルパーティー

一四一

第四章

春……

さよなら太陽　S10トビックスー〇〇号　洗濯と水く
み　苦肉の第、極光観測強化週間　S10トビックス日
本特派員　農民車、南極大陸に行く　ミッドウィンタ
ー祭　昭和基地の電力　閉じ込められる憂うつな毎日
南極大学講座　太陽の季節　ひげの話　生地まるだ
しの楠隊長　初日の出　アポロー一号のころ　素晴
らしき太陽　越冬後半戦　F一六地点　健康診断
さらば、もぐらの生活　新入社員　春のデポ旅行迫る
基地の入浴　春近し　デポ旅行隊出発　肉親の死
S10トビックス二〇〇号　難航するデポ旅行隊　通信
こぼれ話　旅行隊、デポ地点到着　彼岸のころ

一九九

春がきた！

SOS受信

内陸調査旅行隊出発迫る

内陸調査旅行隊出発　じつくりムードの旅行隊　リラ
ックスムードの昭和基地　ベンギン　快調な便所カプ
ース　サストルギ地帯　旅行隊の食糧と調理　軌道
に乗らない三角測量

第五章

ふたたび夏

二一九

南極条約締結一〇周年　南アフリカの越冬隊員遭難死
ソ連機飛来す　雪どけ洪水　やまと山脈見ゆ　基地
は年末の大清掃　両親を亡くした蜂須賀隊員　旅行隊
強行軍　正月休戦の昭和基地　第一便飛来す　「ふ
じ」接近難行　やまと山脈の正月　KC一四号車走行
不能　旅行隊帰途へ　三か月ぶりの昭和基地　サヨ
ウナラ昭和基地　ロケットの打上成功　「ふじ」離岸
サヨウナラS10トビックス

第六章

帰国へのハプニング

二五七

南極第十次越冬隊員……………二七〇
あとがき

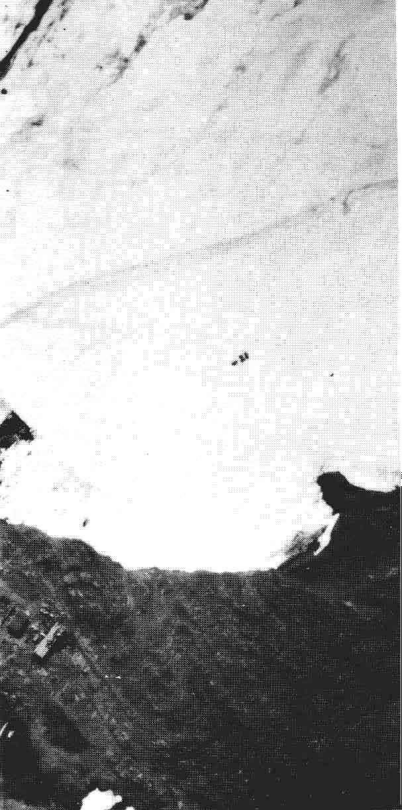


越冬の一年

リュツォホルム湾を昭和基地に向かう「ふじ」
(1969年1月6日)

此为试读, 需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

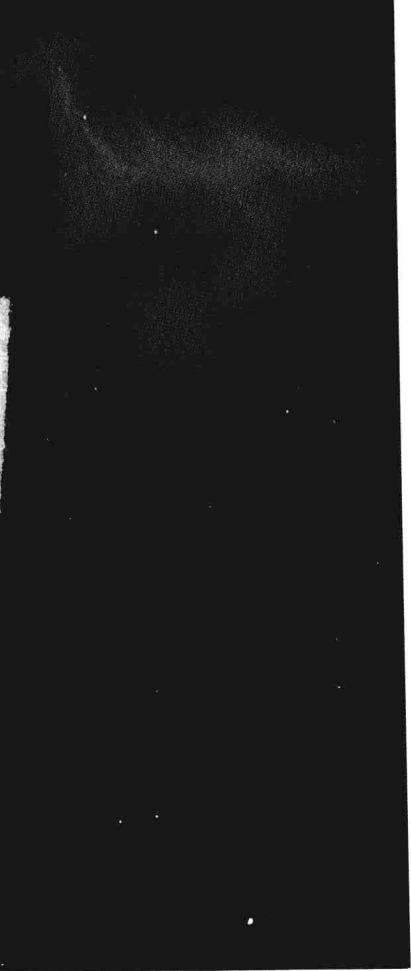
空から見た昭和基地



昭和基地全景



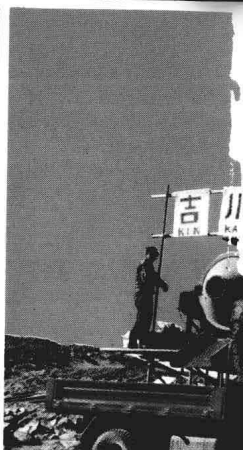




下右：夏の建設作業，ここはジャリトラ組長の
吉川隊員の持ち場である

下左：越冬隊の食事

夜空にあやしく輝くオーロラ





定期便のように基地に襲来するブリザード



上：水平線をころがるように沈む太陽（5月29日）。昭和基地は7月中旬までの40数日間太陽のない暗く寒い憂うつな冬に入る



下：6月21日は南半球の冬至で南極ではこの日をミッドウィンターデイと呼んでお祝いする